

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

津軽の風土が育んだ、幾何学模様的美と温もり。

角館徳子 青森県／草木染め・こぎん刺し作家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

「匠」のモノづくりに挑む「匠」を応援 レクサスが日本全国の

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家)東京大学教授、グエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠と匠研究所)らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。



エリア・コンサルティングにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え、発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。青森県選出の匠、草木染め・こぎん刺し作家の角館徳子さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。



1月18日、プレゼンテーションにて

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイナー関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

こぎん刺しの魅力に惹かれて

角館さんがこぎん刺しと出会ったのは、弘前大学卒業の年。進路に迷っていた頃、ゼミ室に置いてあった冊子でこぎん刺しを見て、日本のものとは思えないエキゾチックな模様と、それがこぎん刺し地方で発達したことに衝撃を受けた。昔の津軽の女性たちが自分のお洒落はもちろん、家族や大切な人のために夢でこぎん



刺しを刺す「その気持ちがかわいいと思った」と角館さん。もともと美術への興味があった角館さんは、この道に進むことを決意した。

2012年、田舎館村に手作り工房「キルクディクディク」をオープン。現在はご主人の

じじいさんと、一歩ずつ前へ

また、作品にブランド名をつけてみては、という事務局の川又俊明氏のアドバイスからヒントを得、自身の作品展開を「なさプロジェクト」と名付けた。「なさ」は津軽弁で「あなたへ」を意味する。愛する人のために針を刺した津軽の女性の気持ちをブランド名に込めたことで、より一層作品への思い入れが湧いてきたという。今後もこのブランド名で作品を発表し続けていく予定だ。



バイヤーと商談中の角館さん

今回のプロジェクトに参加したこと、作品のデザイン性についてより強く意識するようになったという角館さん。また、いつもは試作から完成までの物事を自分ひとりで決めることが多かったが、サポートメンバーや他の匠の匠と接する中で、他者の意見を



作品をプレゼンテーションする角館さん

仕事の関係で東京を拠点とした活動が多く、都内近郊で約30人の生徒にこぎん刺しを教え、津軽の伝統の魅力を伝えていく。

温故知新 先人の思いを受け継いで

角館さんのこぎん刺しは、麻や綿などの自然素材にこだわり、染めの工程も青森の技術で仕上げる。またデザインもさることながら、補強や保温といったこぎん刺し本来の役割も大切に。「こぎん刺しは近年人気が高まってきて

いますが、青森県代表なんだという気持ちで活動しています。雪に閉ざされた厳しい風土があったからこそそのこぎん刺し。そのバックグラウンドを常に意識しています」と思いを語る。

刺しの魅力だ。たつぷりと手刺繍した今回のプロダクトの模様は、伝統模様を使いながらも今の私たちの目から見てもかっこいい、可愛いと感じられるように工夫をこらした。山に入るときにマムシが避ける効果があるとされ、魔除けとしても古くから伝わる「逆さこぶ」という模様を取り入れるなど、こぎん刺しの歴史や背景を意識した作品に仕上がった。

「こぎん刺しだが、今回のプロダクト制作にあたっては、こぎん刺しがもともと衣類に使われていたという原点に立ち返り、身にまとう「こぎんファーマーズベスト」を選んだ。ゲームーズポケットと呼ばれる背面のポケットの内側にも模様があり、手に取った人にしかわからないこだわりポイントの一つ。化学薬品を使わずに藍で染めた綿糸と麻布を使い、二針一針、布目を数えながら針を刺す。モドコと呼ばれる基本模様の組み合わせや展開次第で無限に模様ができるおもしろさと、ストイックな幾何学模様がこぎん



プロダクトの構想



角館 徳子 青森県／草木染め・こぎん刺し作家

2006年弘前大学入学を機に青森へ。2009年に卒業制作で、こぎん刺しと出会う。卒業後、弘前こぎん研究所入社。2012年に独立し化学染めを経て草木での染色を始める。青森県を中心に展示会やクラフトフェアなどに出演。2014年渋谷ヒカリエにてグループ展を行う。2015年星野リゾート界津軽にて企画展示。海外でも「Japan Expo 16」wabi-sabiブース出演。



完成プロダクト「なさ。～こぎんファーマーズベスト～」

